

ダイアログ型話し言葉と「思い地図」の効果的な活用により 「伝え合い、聞き合う」かわりを育てる

～「一つの花」の学習を通して～

志場 俊之

学び合う集団を作り上げるためには、伝え合い・聞き合うかわりの濃い学習文化を作り上げなければならない。自分が伝えたい内容を相手に理解してもらったり、相手が伝えたい内容を正確に聞き取ったりして、思いや願い・考えを共有することが次の思考を促すためには大変重要だからである。そこで、一斉学習での話し合い活動において、ダイアログ型話し言葉と「思い地図」を活用することにより、「話すこと・聞くこと」の力を同時に高め、対象への認識を共有し、更新していく学びを目指した。さらに、それは対立する考えを組織することでより活発に効果を発揮する。

その結果、対立する他者の考えを聞くことにより、常に対象へ戻ろうとするようになった。同時に、自己の思いや願い・考えを見つめ直す機会が増え、他者の思いや願い・考えを吟味する力が育った。そうして、自分に足りないところを補い、余計なものは取り除き、対象への認識を更新する学びが行われた。

キーワード：ダイアログ型話し言葉、思い地図、学習文化、対立する考え、発想力・論理力・表現力

1. 研究の目的

1. 1. 一斉学習で陥りやすい「聞く側」の問題点

対象・他者・自己と対話する学びを通して、自己の読みを深めていく取り組みを行っている。その中でもとりわけ、他者の思いや願い・考えをどのようにして自分の中に取り込んでいくのかが、学校という場所で、仲間とともに学ぶ上では重要になる。

児童の実態調査から、討論の際、他者の意見を聞こうとする姿勢ができていない調査結果が得られた。

たとえば、次の挙げるような子どもの様子である。自分の考えをもつことはできても、相手の意見を聞いていない子ども。仮に聞くことはできても、自分の考えと比べて、自分の考えに生かしたりしようとしていない子ども。このような子どもがたくさんいると、どのようなことが起こるのだろうか。学習の流れを動かせるような発言が出されても、活発な発言の中に埋もれてしまうのである。そうして、互いが自己主張を繰り返したあげく、話し合いが平行線に終わることもしばしば見られる。これは、相手の思いや願い・考えが自分の考えに反映されていないために起こることであろう。

1. 2. 「伝える側」にも問題がある

これは「聞く側」の問題であるが、「伝える側」にも問題がある。

伝えようとする側にも、モノローグ的な話し言葉で伝わりが伝わらなかりが関係なく、発言すればいいという態度が見られる。他者の存在があつてこそその学び合いであるはずが、個人的な自己主張の場となってしまう。

これでは、対象へのものの見方や考え方が変容できるはずもなく、集団で学ぶ意味すらない。

これらは、課題について話し合う以前の学習文化的な問題といえる。学ぶ集団としての機能が果たせていないのである。

1. 3. 「伝え合い・聞き合う」かわりを求めて

そのためには、仲間の意見を聞こうとする意欲や態度、自分の考えと比べて自分の考えに生かしたりする「聞く側」の問題と、伝える相手を意識したり、伝えたいことをどのようにして伝えるかを工夫したりする「伝える側」の問題の2つの側面から考える必要がある。

しかし、それら2つの問題は、同時に起こることであるため、別々に指導するものではなく、伝えることと聞くことをセットにして指導することで初めて効果が表れるのではないかと考え、「伝え合い・聞き合い」の効果的な指導法を考えたのである。

2. 研究の方法

「伝え合い・聞き合い」を効果的に行うためには、2つのキーワードがある。

1つ目のキーワードは、「ダイアログ型話し言葉の活用」である。モノローグ型の話し方からダイアログ型の話し方へと話す側の意識を変えることである。

2つ目のキーワードは、授業の流れを書き込む「思い地図」の活用である。

2. 1. ダイアログ型話し言葉の活用

話す側がダイアログ型の相手意識・目的意識をもつ

ことで、聞く側も話し手に素直に耳を傾けることができる。話し手と聞き手が互いを意識してはじめて、他者との対話がスムーズに行われると考える。普段、1対1で話すとき、相手を見て話し、相手の反応をうかがうことは当たり前のように行っている。

しかし、40人での対話となると、どうしても発表形式に陥りがちになる。

そこで、ダイアログ型話し言葉では、1対1の対話をクラス全員に求め、伝える側はクラス全員を意識した話し方で、時には呼びかけたり、時には同意を求めたりしながら、密度の濃い対話を求めるのである。話し方は少し乱暴になるかもしれないが、その分、仲間の反応を確かめることで、確実な対話が成立していくのである。

言葉を大切に、言葉にこだわり、他者の発言の中から共通点や相違点を見つけたり、叙述に目を向けたりする態度や能力はとても大切な力である。自分の考えを持ちながら相手の考えを聞き、生かすことで新たな自分の考えを持てるようになる。ダイアログ型話し言葉はそのはたらきを円滑に行うための方法である。

2. 2. 「思い地図」の活用

「思い地図」(図1)とは、自分の考えを中心に書き、1時間の思考の変化を表すものである。

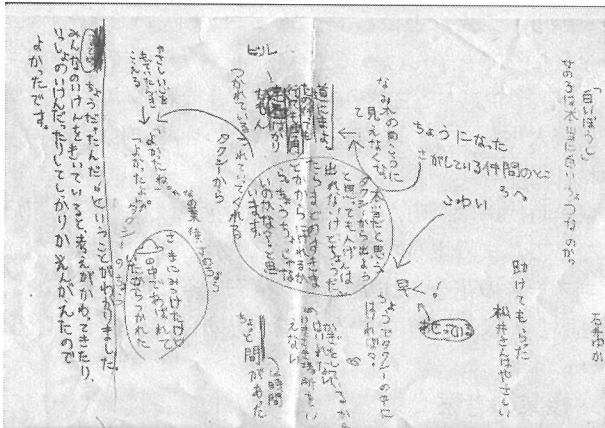


図1: 1児の思考の流れ

最終的に自分の考えが、だれのどのような言葉に揺さぶられ、どのように変化したのかを表すことによって、自己の変容をとらえようとするものである。

「思い地図」の学習への効果は大きい。

まず、聞かなければ書き込めないことから、自然に聞くという態度が身につくことである。

次に、聞く際に、吟味しようとする態度が身につくことである。他者の発言を「思い地図」に書き込む際には、課題に対する他者の発言が自分に近いのか遠いのか、どれだけの距離か、似ている点は何か、違う点は何かといった、自分の考えと比べる視点を持った聞き方が自然に促される。

また、対象との対話を常に促されることである。他者が根拠にした言葉は何か、どのように対象を見ているのかなど、対象にも戻らざるを得ない。

さらに、自己の思考の変化を追うことができることである。「思い地図」は、対象・他者・自己との対話を促し、認識を更新する際の重要な根拠としても、学習の流れを書きとめる資料としても有効に活用できる。

このほかにも、子どもの思考の流れをみとる際の重要な資料としても使える利点がある。

ノートは板書を写すものではなく、1時間での自己の考えの変容を記すものとして位置付けている。そのため、一人一人のノートは出発点が違い、終着点も違う、こだわりをもった学習のまとめにもなるといえる。

2. 3. ダイアログ型話し言葉と「思い地図」の併用

このように、ダイアログ型話し言葉は、伝える側と聞く側の言葉と言葉、人と人を結び、信頼関係を結ぶ。また、「思い地図」は、考えと考えを結び、自己の思考の変容を表す。それらの併用により、伝え合うかかわりと聞き合うかかわりが融合され、一斉学習における中身の濃い対話が成立すると考えるのである。

2. 4. 対立する考えを組織する

ダイアログ型話し言葉と「思い地図」が有効に活用されるためには、対立する考えを組織する必要がある。

他者の発言を聞こうとする姿勢は、よく似た発言を重ねる場面よりも、自分とは違う発言が出されたときに活発になる。自分の考えとの違いは何か、その根拠は何かといった、批判的思考力が育つ場面である。

課題自体で対立させる場合もあれば、出された発言の中から2つを取り上げて対比させる場合もある。どちらにしても、意見の違う相手を説得させようとする側と、相手の考えに足りないところを見つけようとする側の二極化が出来上がる。

3. 授業の実際

3. 1. 授業で大切にしたこと

発想力・論理力・表現力を育てること

物語教材にも論理力を育てる場面がある。自分の考えと文中の言葉をつなげることや、捉えた場面の様子から過去を推察したり未来を予測したりすることは論理力を必要とする。

発想はとかく文章から離れて一人歩きしてしまいがちになる。場面の情景から浮かんだ考えが新たな想像を呼び、文章の叙述に即した読みではない空想の世界で話し合いが展開していくことがしばしばある。それをつなぎとめるのは、叙述に立ち返った確かな文章読解力と論理力であると考えられる。

豊かな発想力、それを支える確かな論理力、その考えを他者に正確に伝える表現力、この3つの主体的能力が新たな問題意識を生んだり、新たな気づきをもたらしたりする。それが、学びの質を高めていくことにつながるのである。

だからこそ、文章を叙述に即して正確に読むことを重

視し、文章と論理的なつながりを持ちながら発想の幅を広げ、仲間を意識した表現の仕方へとつなげていきたいと考えている。

そこで、この単元では新学習指導要領を意識し、国語科提案にある「発想力」「論理力」「表現力」を育てる構想を持った。新学習指導要領にもある事実と意見との関係や登場人物の性格や気持ちの変化、発表し合うことも意識しなければならない。

まず、発想力を育てるために、場面の情景を叙述に即して最大限に引き出すことが必要と考えた。そのため、戦争時代の生活に起こったこと、食べ物、コスモスの花のイメージを色・数・たとえなどを利用し、膨らませておく。そうすることで、10年後の生活との違いをより鮮明に比べられると考えたからである。

次に、論理力を育てるために、この教材「一つの花」では作品の主題をつかむことを中心目標と位置づけた。言葉にこだわりながら、自分の作品の解釈が、教材「一つの花」との対話や他者との対話を通して、どのように変容していくのかといった自己との対話を促すことが論理的な思考を育てることにつながると考えたからである。

また、表現力を育てるために、聞き合う関係を築かなければならないと考えた。聞き合う関係を築くことで伝え合う関係の素地ができるからである。そのために「ダイアログ型話し言葉」と「思い地図」を利用した。授業の終わりには「学習のまとめ」として、1時間の流れの中の自己の変容をまとめたり、話したりする機会を設けた。教材「一つの花」の終わりには、主題についての自己の変容をまとめたり、話したりする機会を設けた。

3. 2. 「父親がゆみ子に一つの花を渡す場面」について

父親にとって、ゆみ子との最後の別れの場面。両親の、特に父親のゆみ子への思いを読み取る学習である。

父親が渡したコスモスにはどのような意味があるのだろうか。ゆみ子をあやすためのものか、そのほかにも理由があるのだろうか。コスモスの咲いていた場所や様子、ゆみ子に残した「一つだけのお花、大事にするんだようー。」という最後の言葉、ゆみ子の握っているコスモスの花を見つめながら去っていった様子など、コスモスに託した父親のゆみ子への思いを探っていく内容である。「命の大切さ、戦争の無残さ、父親の愛情、家族の絆」という、主題とかかわる発言を引き出すことを意識した。

3. 3. 授業の流れ

ダイアログ型話し言葉と「思い地図」を活用した「一つの花」の学習

父親がゆみ子に一つの花を手渡す場面。課題は、「一つの花は、ゆみ子をあやすためのものか。」である。

「あやすためのものである」と「あやすためのものではない」の2つの考えの対立から、一つの花の意味という共通の認識を見出し、そこから、一つの花を渡した父親のゆみ子に対する思いを探っていこうと考えた。

「あやすため」という意見では、「ゆみ子は花が好きそうだから渡した。」とか、「父親が真剣に探しているし、ゆみ子の喜ぶ姿を見て父親も喜んでいるから。」とか、ゆみ子の泣き顔を見たくないから泣き止ませることを目的に渡しているという意見が多かった。

「あやすためではない」という意見では、「ゆみ子に父親のことを覚えていてほしい。」とか、「戦争に行ってしまうので、二度と会えないから、何か深い意味があるのでは。」とか、「最後のプレゼントになるので一つの花に意味をこめている。」とか、あやす意味以外の、父親の深い思いがあるという意見が多かった。

また、はじめから、あやす意味とその裏に隠された父親の深い思いを考えている子どももいた。最後のプレゼントにしても、そこにこめた父親の思いを考える必要があった。

さらに、「ゆみ子の握っている、一つの花を見つめながらー。」から、最後に、父親が見つめていたのは、ゆみ子ではなくお母さんでもない、一つの花を見つめながら行ってしまった父親のゆみ子への思いは、一つの花にすべて託されたと読むことができる。

そこで、一つの花の意味について考えた。「ゴミ捨て場のようなところに忘れられたように咲いている」場所や様子から、「こんなところでもがんばって咲いてきた」「こんなところでもがんばって生きている」「一人で咲いている」「踏まれないで生きてきた」など、一輪のコスモスの花を擬人化したり、ゆみ子に重ね合わせたりした読みが行われた。

戦争時代には、町が焼かれ、家が焼かれ、すべてが灰になってしまうような環境の元で、がんばって生きているコスモスの花をこれからのゆみ子の姿に重ね合わせて、「克服してほしい。」という父親の思いを読み取っている。

4. 授業の考察



図2：N児の発言の様子

N児は、「あやすためのものではない」という意見で臨んだ。「あやすため」と「あやすためではない」という意見対立がある段階で、お父さんの思いについて、次のような発言をした。(図2)

「ぼくは、お父さんの思いには表と裏があると思います。

表から話すんやけど、表にはゆみ子をあやしたいとか笑顔を見たいとかの思いがあると思います。裏にはもっと重大な思いがあって、最後のプレゼントだからもう2度とゆみ子に会えないかもしれないとか、覚えてほしいとか大事にしてほしいとかの思いがあったと思います。」

これは、「あやすためのものである」という子どもたちの発言を受けて、「もちろんそういう思いもあるよ。」と、決してそれは間違っていないという優しさのある発言であった。表と裏があり、裏にはもっと深い父親の思いがあることを伝えようとした発言であった。

その後、M児が、N児たちの意見をを受けて発言した。(図3)



図3：N児の発言を受けて、考えの変化を話している様子

M児は「あやすためではない」と考えてはいたものの、まだ深く考えられてはいなかった。次のような発言である。

「みんなの意見を聞いていて、意見が変わったんやけど。～ページに『どんな子に育つだろう。』ってあるやろ。(みんな、「うん」とうなずく)前は、ほしがってばかりでさ、甘えてたやん。(うん)でも、花はゴミ捨て場のようなところでもがんばって咲いてたやろ。(うん)だから、お父さんがいなくなってもこの花のように元気で育ってほしいっていう気持ちがあると思うんよ。(うん)だから、たくましく育ってほしいっていう気持ちの一つの花にこめられてると思います。」

最後に、N児もさらに自分の考えを変容させている。「町や都会だったら倒れてるかもしれへん。でもこの花は一つだけでも咲いてたんやろ。(うん)ぼくは思ったんやけど、その一つの花は、ゴミ捨て場のようなところでも生きてるやん。(うん)そんなところで生きるにはいろんな困難があると思うんよ。(うん)そのいろんな困難を乗り越えて咲いてるんやろ。(うん)だから、ぼくは、そんな困難を乗り越えてゆみ子に生きてほしいと思ってると思います。」

父親の思いを想像したとき、「すくすくと育ってほしい。」「一つの花のようになってほしい。」「生きてほしい。」

という考えが出された。これは、まさしく、コスモスの咲いている状況、コスモスの境遇、コスモスの可憐さ、コスモスの強さ、コスモスのたくましさをそのまま、これからのゆみ子の生きていく道に重ねた思いであることを子どもたちが読み取ったからこそその発言であったと捉えることができる。

「あやすためのものか」から、もちろんその意味もありながら、もっと奥深いところで、ゆみ子の行く末を案じながらも、幸せを願い、一輪のコスモスに父親の願いのすべてをこめたわけを読み取る学習であった。同時に、子どもたちは、別れのつらさも感じ取ることができたであろう。

こうして、一つの花の意味や、その一つの花を渡した父親の思いを読み取る学習が行われたのである。

5. 成果と課題

ダイアログ型の話し言葉で対話を呼びかけても、はじめは、恥ずかしがってノートを読んだり誰にともなく話したりする姿が見られていた。対話の姿が定着してからは、自然な姿でみんなの顔を見て、話しかけようとする姿が一般的になった。

うなずく姿が発表者の心を支え、一体感が増した。後ろの子どもが発言するときは体を向けて聞こうとする構えも定着した。

話すことと聞くことは常に表裏一体であり、対話という形の指導なくしては一体感は生まれない。

その過程では、他者を見ながら「聞いてください。」と呼びかける姿、伝えようと他者に対して話す姿が見られた。また、他者の発言に従い、ページをめくったり、うなずいたり、相槌を打ったりする姿も見られた。他者の発言を吟味し、「思い地図」に書き込む姿や、自分の考えを変容させてみんなに伝える姿も見られ、クラスが一体となりながら学びが進められていった。

対立する課題が自分の立場を決定し、対象との対話を活性化させる。他者へのはたらきかけを意識した対象との対話を促すことにつながる。

参考文献

モノログ型話しことば教育とダイアログ型話しことば教育

(村松 賢一：前お茶の水女子大学教授)

対話能力を育む話しことば・聞くことの学習—理論と実践(21世紀型授業づくり)